

ハイデルベルク信仰問答より

問 47 それでは、キリストは私たちに約束なさったように、この世の終わりまで、私たちといっしょではないのですか(マタイ 28:20)。

答え キリストは、真の人にして真の神であります。人間としての主は、もはや地上にはいないのです(ヨハネ 17:11)が、その神性と主権と恵みと御霊とにおいて、主は決して、私たちから離れてはいないのであります(ヨハネ 14:18-19)。

問 46 では、私たちが「主の昇天」をどう理解しているかを考えました。そこには三つのポイントがあったことをまず振り返りましょう。

- ①キリストは弟子の目の前で天に上げられた
- ②やがて再臨して審きを行なわれる
- ③私たちのために天に留まっておられる

問 46 を読んだある人が、「あれれ？」と疑問に思っただけで更に問うてくるのが問 47 の内容です。「イエス様は『世の終わりまであなたがたと共にいる』と言われたのでは 아닙ねか？でも、天に昇ってしまったら、共にいることにならないじゃないですか？」という、やや不満な気持ちの表れと言えましようか。

この気持ちは、主イエスと実際に共に歩んだ十二弟子が感じたことを代弁しているとも言えるでしょう。主イエスと弟子たちが地上で一緒にいた時間はわずか3年でしたが、それでも弟子たちにとって主の存在がどれほど大きなものであったかは、想像に難くありません。頼りにしてきた師や親と別れる淋しさは、誰もがどこかで経験することでしょう。分からないことがあればこの人に聞けばよい、何か困ったことがあればこの人に相談すればよい。そういう「心の支え」が私たちにはどこかで必要です。しかし、地上では別れの時が必ず訪れ、頼りにしてきた人の存在が大きければ大きいほど、その人を失ったときの不安と空虚感はい言表しがたいものとなります。弟子たちにとっての主イエスは、自分たちのためにいのちを捨ててくれた救い主であり、愛と厳しさに溢れた教師でもありました。聖書を根本から解き明かす主の教え、罪人を惜しみなく救いに招き入れる温かな御手、病人をことごとく癒す力。弟子たちがこのような主と共にいた安心感は何ばかりだったのでしょうか。

主イエスが弟子たちを離れて姿が見えなくなっただけで行かれるとき、弟子たちの心には不安があったと思われまます。自分たちが支柱としていた存在がなくなっただけです。ユダヤ当局の迫害をどう乗り越えていくべきか、人々に何をどう宣べ伝えていけばよいか、先行きの見えない恐れに包まれていたことでしょう。そのような弟子たちに対して、主が賜った命令と約束がありました。

- ・ わたしには天においても、地においても、いっさいの權威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。（マタイ21:18-19）
- ・ わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。その方は、真理の御霊です。（ヨハネ14:16-17）
- ・ わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしは、あなたがたのところに帰って来ます。いましばらくで世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからです。（ヨハネ14:18-19）

ハイデルベルク信仰問答の回答では、昇天後の主イエスの存在の仕方が、キリストが保有しておられる「神性と人性」に基づいて説明されています。「人間としての主は、もはや地上にはいない」とあるように、復活のからだ（栄光のからだ）に甦られた主の肉体は天に属するものですから、神の許に引き上げられ、地上にはもはや存在しないものとなりました。しかし、主イエスは「真の神」としてのあらゆる属性をもって、地上に存在し続けておられるといいます。全知全能、遍在、無限なる神として、あらゆる事象を知り、どこにでもおられ、永遠の世界を支配しておられます。その臨在の仕方は、「その神性と主権と恵みと御霊とにおいて」。ペリーはこのところを、「完全に御言葉によって地上におり、それを確認する聖礼典に臨在しておられる」と説明しています。ここには、礼拝における説教と聖餐の重要性がほのめかされています。御言葉を通して福音が語られるところに主はおられる。聖餐において信者との契約が更新されるところに主はおられる。信者の内に住んでおられるキリストの御霊は、御言葉が語られ聖礼典が執行されるときに、最大限に活動されるのです。そして、聖霊に満たされた信者たちが世に送り出され、彼らを通して世界に対してアプローチしていかれます。

主が昇天されて後、ペンテコステの日に弟子たちに聖霊が降りました。この出来事が起きたのが、やはり一同が会していた礼拝の時間であったこと、御言葉が読まれ祈りがささげられていた時であったことは、主がどのようなところに来られる方であるかを豊かに物語っているでしょう。この祈祷会にも確かに臨んでおられるはずです。そして、共に集まった聖徒たちは、永遠のインマヌエルを確かめ合って、再び世に出て行くのです。